
ラブカ!!～恋愛シュミレーション的カードバトル～

暁 紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカ！！～恋愛シュミレーション的カードバトル～

【Nコード】

N5914F

【作者名】

暁 紅葉

【あらすじ】

なんやかんやでオタクな私があった世界は恋愛シュミレーションとカードバトルが混ざったオンラインゲームの世界で!?

ラブlevel零(前書き)

微妙なラブシーンや微妙に流血などがありますのでお気をつけください

ラブlevel零

「ねえねえお嬢ちゃん」

明らかにチャラ夫が誰かにはなしかけてるみたいだ

『…（私には関係ないか）』

通り過ぎようとするとそのチャラ夫は私の肩に手をおいた

「無視なんて酷いなあゝお兄ちゃん泣いちゃうよ？」

そのセリフが私に向けられてることに気づくのに2分かかった

『…私？』

そう言うのとチャラ夫はニヤニヤしながら私の肩を寄せて

「そう♪お兄ちゃんとこれからお出かけしない？？」

…うん、キモイ☆

あと…とりあえず聞こう、私の年を

『あの…私何歳に見えますか？』

チャラ夫は相変わらずニヤニヤしたまま

「お嬢ちゃん？12歳かな？」

…12歳？アレか？小6か中1どっちな訳？

『…あの、失礼ですけど私…18歳ですから』

そう言うのとチャラ夫は固まった

さらに私は続けて

『あと私…リアルな人間には興味ありませんから』

そう言って私は目的地に向かって歩き出した…

「……」

――

私の目的地はゲームショップだった

ゲームショップに着くとすぐに乙女ゲームのある棚に向かって目的のゲームを探す

『うーん…どこかなあ？』

…あったあー！！翼斗君がトップに居る！！やべえよ胸キュンだあ

(＊、ん、＊)』

さつきと性格が違う？

いえいえ、こちらが素です

そんな事より私が手にしたゲーム、【らぶオト!!】は全部で3つのシリーズ物で
ヒロインは吹奏楽部で頂点を目指しながら色んな男子と出会っている物語である

『…ついに最終シリーズかあ』

…ううショックだな

でもまあ早く買ってやろーっと

『…』

ルンルン気分で家に帰っていると後ろから

「おい美咲」

その声に振り返ると私の幼なじみの氷牙 怜治がいた

『あ、怜治どうしたの?』

今回のゲームはどんな感じかなとか思いながらも怜治の方をむくと

「…お前またシュミレーションゲーム買ったのか？」

呆れ顔でそう聞いてきた

『またって何だよ！酷くない？』

ぷーとほっぺを膨らませると怜治は少し顔を逸らし

「この間も買ってただろ…はぁ、もつとまともなら俺だって」

言葉の最後はボソボソ声で聞こえなかったけど

私はムツとした顔をしクルツと後ろを向き

『もーいいし！！バイバイ！！』

ずんずんと歩いて帰ろうとすると

慌てて私を追いかけてきて

「ちょっとまってよ、俺はコレを渡しに来たんだよ」

そう言いながら私に白い封筒を渡した

『…まさか私へのラブレ

「違うつ／＼！！」

顔を赤くしながら私のセリフを遮る

「…なんか拓人って奴がお前に渡せて行ってたぞ」

まだ顔が赤い怜治がそう言った
『え！？拓人君から！？』

拓人君は私が現実世界で初めて恋した相手だ

：そういえば昨日ラブレターを渡したんだ！！

『あ、有難う！！』

じゃあ怜治、またね！！』

怜治の手から封筒を取って私はニヤニヤしながら家に向かって走った

――

早速だけど私は封筒を開けた

『やべっドキドキしてきたー！！』

軽く深呼吸をして中にあった手紙を読む

《有馬へ

拙者への手紙、有難う

手紙の返事だが、拙者としては直接返事がしたい
だから明日の放課後、校舎裏でまっている

土方拓人》

あー！！やっぱり古風な感じが格好いい……！！

『明日が楽しみ!!』

そんな事叫びながら私は買ったばかりのゲームをセットして電源を入れた

――――

薄暗い部屋でパソコンをいじる人影…

「…やはりバグが出てきているな、このままでは壊れるのも時間の問題か…

こうなったら…早く彼女に、有馬美咲にあの世界に行って貰わなくては」

人影は立ち上がるとスツと闇に溶けていった…

。

ラブlevelせ!!

P i p i p i p i :

部屋に響く携帯のアラーム音に目を開けぼーとしながらも携帯の画面を見る

そこには大好きなキャラの待ち受けと隅に8時20分とあった

.....

『遅刻だぁー!?!?』

ガバツと立ち上がりバタバタしながら支度をする

『昨日ゲームやりすぎたー(泣)』

あっという間に支度をするも鞆を掴んで家を飛び出した

『こんな時に限って両親は仕事早いだよねー(泣)』

半泣きで走りながら学校に走っていった

…あはは、遅刻しました(泣)

でも大丈夫さ!! 私には拓人君が居るから!!

私は放課後が来るのを楽しみにしていた…

そして、あつという間に放課後になり私はルンルン気分で約束の場所に向かっていた

…あ！あそこに居るのは拓人君かな？？駆け寄ると

「有馬…か」

そこには愛しの拓人君が

『（…あれ？）あの、本当に拓人…君ですよね？』

目の前にいるのは拓人君なのに何故かそれが拓人君に見えなかった…

「…拙者は土方拓人だが？」

首を傾げてそう言った

『（…気のせいかな？）』

ごめん…そうだよ、変なこと言って御免なさい』

私が謝ると気にするなと言ってくれた

そして話は本題に入る

『あの、返事何ですけど…』

私が拓人君を見つめると拓人君は悲しそうな顔をして

「…すまない、拙者は付き合う事は出来ない」

そう言った

『…そうですか…分かりました』

私は静かにその場から立ち去った

――

彼女が立ち去ってから少しして、後ろから剣道着を着た拓人走って来た

「ハア、ハア…すまない、部活から抜け出せなかった…

…拓海！？その格好まさか！？」

拓人は目の前にいる自分そっくりな人に拓海、といった

すると拓人にそっくりな人は笑いながら長い黒髪を引っ張った、すると髪はスルツと頭から外れ、色素の薄い短い茶髪の髪が出てきた

「ゴメンね兄さん、あのコ振っちゃった」

クスクス笑いながらこういったのは、拓人の双子の弟の拓海であった

2人は一卵性のため顔が似ていて、悪戯が好きな拓海はよくこうやって遊んでいた

「…お前、いくら何でもやって良い事と悪い事があるだろう」

静かに、しかしそこには怒りを確実に感じるように拓人はいった

「だからゴメンって、兄さんの本命だからなんか意地悪したくなっちゃって（笑）」

まだクスクスしながら言う拓海に拓人は

「彼女はどこに？」

「…学校の外を右に曲がったよ」

拓海がそう言うのを聞くやいなや拓人は走りだした

「…実は僕もあのコが気になってるって言ったら兄さん驚くだろうな（笑）」

そう呟いてから拓海も初めて変装を見抜いた彼女の元に向かって走りだした

その頃美咲はただひたすら走っていた

…そうだよね！！私みたいなオタクが拓人君と付き合える訳ないもんね！！

分かってはいたけど、ゲームと現実との差に悲しくなった

『もうやだっ！！ゲームの世界に行きたいよー！！』

そう言いながら走っていると人にぶつかってしまった

尻餅をつく私

『痛たた…』

痛みに顔をしかめていると上から

「連れて行ってあげようか？」

その言葉に驚いて顔を上げると

眼鏡をかけたお兄さんが笑顔で手を差し伸べながらこういった

「ゲームの世界に、連れて行ってあげようか？」

n
e
x
t

ラブlevel式!!

…私のはっきり言ってお兄さんは私をからかっているのかと思っていると

「行きたいんでしょう？ついさっき言ってたよね？」

お兄さんは笑顔で手を差し伸べたまま言った

聞かれてたー！？恥ずかしいんですけどΣ（。；）

けど何故か私はお兄さんの手を掴まなくてはいけない気がして……
お兄さんの手を掴んだ

――――

怜治は部活が休みだったので一人で帰っていると

目の前に見知った顔の人を見かけた…美咲だった
そして美咲は見知らぬ男と歩いていた

「アイツ…誰だ？」

少し胸騒ぎがして2人を追いかけようとした時、後ろから声が聞こえた

「おい!!」

振り返ると昨日手紙を渡してきた男：拓人？と拓人にそっくりな男がいた

「…なんスか？」

俺がそう言うのと拓人？は

「有馬殿を見かけてはいないか？」

少し焦ったようにそう言った

「…美咲なら今あつちに」

そう言うのと拓人？に礼を言われてそっちにそっくりな人と走っていった

「…俺も行くか」

怜治は拓人？達の向かった方向に走っていった

ついたのは普通の家だった

お兄さんに案内されて私は機械が沢山ある部屋に通された

「ここに座って」

お兄さんはパソコンが置いてある机の前の椅子を引いて言った
言われた通りに座るとお兄さんは少しパソコンをいじり

「この中から好きなカードを最高30、最低でも10枚選んで」

パソコンを私に向けてそう言った

画面を見るとそこには格好いい人のカードや可愛い生き物、変な道具のカードがあった

『好きに選んで好いんですか?』

私が聞くと

「勿論、好きなのをどうぞ、道具の説明はちゃんと読んでね」

そうお兄さんは爽やかな笑顔でそう言ったので、私はよさげなのを選ぶ

まずはエルフとダークエルフと…騎士もいいな

『んー悩むなあ…』

なんかこのカードのキャラ…人型がみんなイケメンだ(＊´▽´＊)

…あれ?

『あの…質問なんですけど…』

私がお兄さんと呼ぶと

「何かな？」

『なんで…このカードは男の人ばかりなんですか？女の人のカードはないんですか？』

するとお兄さんはああ…と言い

「そう言えば説明してなかったね…今君が選んでいるカードはラブカード略してラブカと言うんだ。そしてこのカードは…まあ、ゲームとして一部では人気なんだ

まあ、説明はあとでゆっくり言うけど、このゲームの中ではカードと恋愛出来るんだよ、だから女のカードは少ないんだ

あと…ここの友人カードをクリックしたら女の子のカードが出てくるよ」

お兄さんはさらっと言うが…沢山の説明を言うと少し後ろにあるテーブルに向かって椅子に座った

…私の頭では考えきれなかったが後で教えてくれるからいいか♪

それから私は獣型カードや魔法カードなども決めた

あとは…

「道具だね」

いつの間にかお兄さんは私のすぐ隣にいた

『（いつの間に…（^^;;）…はい、でもなんか沢山ありすぎて…悩みます』

私が画面をじーっと見つめた…悩む、なんか魅力的なカードが多いし

「まあ、道具カードは少し多くてもいいかな？」

それと、はい紅茶…と紅茶を渡してくれた

わあい！！好きな選ぼう！！

………

『やった、終わった！！』

それから服やら付き添いペットやらを決めて…今終わった

「うん、全部終わったね」

お兄さんも嬉しそうに言う

『お兄さん…そう言えばお兄さんの名前は？
私の名前は有馬 美咲です』

あはは…今更だが聞いていなかった（。▽。；）

「私の名前は、藤林 修一：修一でいいよ、よろしくね」

お兄さん…もとい修一さんは微笑んだ

「じゃあ次の段階を始めようか：ついてきて」

…次！？

『へ、まだあるんですか！？』

私は修一さんの後をついて行きながら聞いた

「勿論、っていつでもすぐ終わるから」

そう言って、修一さんは立ち止まると私の方を向き

「此処だよ、此処の扉をくぐればゲームの世界に行けるよ」

微笑みながら修一さんは後ろにある扉を軽く叩いて
ポケットから何かを取り出すと私に差し出す

『…：ゲームの世界に：行ける…』

私は小さく深呼吸をして、差し出された物を受け取る…何やら画面
みたいなのがついていいる黒いリストバンドだった

「…：利き手に着けて：そのまま扉の向こうに行きなさい…」

私はその言葉に従い利き手に着けて、扉を開いた

私は眩い光に包まれて部屋の向こうへ消えていった……

「行ってらっしゃい……夢の世界へ……」

n
e
x
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914f/>

ラブカ!!～恋愛シュミレーション的カードバトル～

2010年10月11日20時17分発行